

## 第9回資源管理ワーキンググループ

### 議事録

日時：2017年10月27日（金）9:30～11:30

場所：虎ノ門ヒルズ9階 RIO 会議室

出席者：崎田座長、杉山委員、白井委員、古澤委員

勝野オブザーバー

※本議事録では、ディスカッショングループを「DG」、ワーキンググループを「WG」と記しています。

事務局：時間となりましたので始めたいと思います。皆様、本日はご多用の中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。第9回資源管理WGを開催いたします。

本WGはメディアの皆様にも公開とさせていただいております。カメラ・スチールの皆様は冒頭撮影のみとさせていただきますが、ペン記者の皆様は会議傍聴可能とさせていただいておりますのでよろしくお願いいたします。本日は崎田座長はじめ4名の委員及びオブザーバーにご出席いただいております。それでは、開会にあたりまして崎田座長より一言ご挨拶をお願いいたします。

崎田座長：おはようございます。皆さんご存知かと思いますが、10月は3R推進月間ということで、色々な所で3Rに関するイベントが開かれています。今週の頭には3R推進全国大会が沖縄で開催されました。細田先生が基調講演で、私がお後のシンポジウムを担当しましたが、島しょ部の3Rということで話し合いました。しっかりとした地域循環圏を作っていくことの大切さですとか、島しょ部にもやさしい3Rということで色々なことを話し合いましたが、どんな事業やイベントの際も、お後のことを考えながら行うことで、3Rの全体像と、そしてもう1つ、皆さんの協働といった柔軟な発想で、しっかり考えていくことが大事かなと思っています。

今日は本当に大事な所です。具体的な所を話し合っていきますので、是非意見交換をしていきたいと思っています。この分野がご専門の先生方、行政の皆さん、オブザーバーの方と、色々な方がこの場に揃っておられますので、できるだけ皆さんとしっかり意見交換できたらと思っていますので、ご意見がある方は積極的に共有していただいて、次の会合につなげていくということで話をしていければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局：崎田座長ありがとうございました。プレスの皆様は冒頭撮影はここまでとなりますのでよろしくお願ひします。それでは、以降の議事進行は崎田座長にお願ひいたします。

崎田座長：それでは、議事に沿ってということで行きたいと思いますが、まずは前回の振り返りということで事務局からご説明をお願ひいたします。

事務局：資料2を用いて、前回WGの振り返りについて説明。

崎田座長：ありがとうございます。前回のまとめに関して、何かご質問やご意見があれば伺いたひと思ひますが、よろしいですか。それでは前回このような話し合いをしたということに基に、今日の話に入りたひと思ひます。

先ほど、今日の項目を見ていきながら、次の項目に関連するので後ほどで良いのですが、準備の段階と実際に実施する段階とその後とどのように対応していくかを明確にすることで、リユースなどに私たちがしっかりと視点を向けているんだということ、より強調する、あるいはそのようなことの発信につながるのではないかと思ひながら読ませただきました。その点については次の資料の時に発言したひと思ひます。

それでは今日の中心的な所が資料3なのですが、分野が多いので分けて説明いたひで、説明毎に意見を伺った後に、最後に時間を取って全体の意見交換をするという進め方で行きたいのですがよろしいでしょうか。それでは事務局さん、資料をいくつに区切りましょうか。

事務局：まず、最初にスケジュールと今回の論点についてご説明して、あとは3項目ございますので、合計4つに分けたいと思ひます。

崎田座長：わかりました。それでは全体の構成を簡単に説明してから始めてください。よろしくお願ひいたします。

事務局：資料3 p1~p2を用いて、今後の資源管理WGのスケジュールと今回の論点を説明。

崎田座長：今、本日の論点ということでご説明がありました、p1のスケジュールとp2の論点について、ご質問があればと思ひます。全体的な意見交換の時間を最後にするようにしたいと思ひます。

古澤委員：前のDGの時に、広く意見を募るといふことも考える必要があるのではないか

という議論があったかと思いますが、その辺の意見を踏まえながら、WGで検討を進める必要があると思うのですが、その辺りのスケジュール感がもしあればご教示いただきたいと思います。

崎田座長：前回の持続可能性 DG でそのような議題が出たかと思いますが、現在、どのような状況で進める予定か教えていただけますか。

事務局：前回の DG の中で、この段階でパブコメ等をやっていくべきではないかというご意見が出まして、その点につきましてはスケジュール等を調整しながら、やる方向で検討を進めています。

崎田座長：時期という点では、私たちは何回目の WG でご意見をお伺いできるのでしょうか。

事務局：その辺りも含めて現在は調整中というところです。

崎田座長：わかりました。できれば第 11 回の WG でご意見を受け止めることができれば、全体の総論に関わるご意見のところですので、受け止められたらうれしいと思います。ぜひ進めていただいて、また日程が固まったら情報をいただければとありがたいと思います。

それでは次に進んでいきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

事務局：資料 3 p3 を用いて、東京大会の資源管理の全体像について説明。

崎田座長：ありがとうございます。私たちは毎回走りながら考え、決めていくという形で、ここまで来ました。前回の WG で、Zero Wasting というキーワードをしっかりと使いながら方向性を示していくということに関しては、委員・オブザーバーの皆さんに同意いただいたと言いますか、方向性はいただいたかと思いますが、議論はあまり深めていないというところもありますので、ご意見がある方は色々とおっしゃっていただければと思います。前回の脱炭素 WG との合同勉強会でも、例えばキーワードについては、脱炭素 WG では、Zero Carbon という今世紀後半の世界の目標を打ち出したいという話でしたが、本当にすぐに Zero Carbon が実現できるのではなくても、Zero Carbon を目指すということを明確にすることが重要なのだというお話を盛んにされていました。資源管理 WG でも Zero Waste というキーワードは具体的な数値目標ゼロではなくて、方向を目指すことをはっきりさせることを皆さんで共有したことが大事だと思います。それを実現するために、Zero Waste ではなく Zero Wasting という言葉で示したらどうかというご意見でここまで

来ました。関連するご意見があれば頂ければと思います。

古澤委員：今座長がおっしゃられたところで全くその通りだと思うのですが、Wasting という言葉については、色々先生方からご提案があったときに、進行形というよりも、むしろ Waste という動詞に着目して、単に廃棄物ということだけではなく、無駄を作り出さないということや、土地を荒廃させない資源の利用といったことを目指すために、あえて動詞にしているということが基本的なテーマであったかなと思います。方向性を示すということについては、カーボンと同じ趣旨だったかと思うのですが、タイムスパンからすると、カーボンは今世紀後半ということに対して、Zero Wasting という言葉は国際的に使われているという訳ではなくて、イメージで言うと、「持続可能な消費と生産」ということについては SDGs の 2030 年、場合によっては、土地を荒廃させないという方に関しては愛知目標の 2020 年に関わってくることも結構あると思いますので、もちろん方向性は方向性としてしっかりと押さえないとはいけませんが、タイムスパン的には、カーボンよりは少し短いという印象も国際的なイメージではあると思っています。

いずれにせよ、方向性としての Zero Wasting という言葉を掲げて、持続可能な開発目標に貢献をしていくんだということで、政府の方でも持続可能な開発目標の推進本部を立ち上げられて、オリパラ関連でも、そちらの側面からも非常に注目していただいていると認識しております。持続可能な開発目標のうち、特に目標 12 を中心に、資源管理分野では Zero Wasting ということを掲げていくことが基本線かなと認識しております。

もう 1 点ですが、概念はしっかりと押さえつつも、事務局や組織委員会で詳しい方もいらっしゃると思うので、何か広く共感を生み出せるような言葉遣いを工夫していただくことも大事かなと思っています。Zero Wasting という実例を示して、そのような方向を目指していくということが広く伝わって、多くの人に共感を持っていただけるような言葉をぜひ作っていただければと思います。

崎田座長：ありがとうございます。今、SDGs の目標 12 「持続可能な消費と生産」に関して、世界的な課題の中では非常に明確なターゲットであるということと、もう一つ、具体的に、社会に発信力のある、共感を呼ぶような言葉と言いますか、サブタイトルと言いますか、そのような情報を常にタイトルと共に出して行くことが重要であるというご意見がありました。それに関しては私も賛成なので、このタイトルに関してどのような方向性の文章を入れるかということについては、明確にしていきたいと思いますので、次回以降の資料作りの時に今後事務局と相談させていただきます。いくつか例を示しながら、皆さんの意見を集約していければと思います。この点について他に何かございますか。

白井委員：Zero Wasting という言葉に対してどう説明をつけるかというところで、説明としては例としてお示しいただいているような言葉なのかもしれませんが、Zero Wasting と

という言葉の説明するのに Zero Wasting を含む言葉にするのではなく、日本語のみで説明をすべきではないかと思えますし、荒廃させないというよりは、例えば守っていくといった、よりポジティブな言葉使いをできれば良いと思えます。

崎田座長：守るとか作るといったポジティブな表現も重要ですね。ありがとうございます。

勝野オブザーバー：今回の WG では主に目標の話を中心に議論していくので、もう少し後の議論になるかもしれませんが、目標を設定したら具体的なアクションとしてどのような行動に移せばいいかということも併せて提示していく必要があると思います。例えば、Zero Wasting という言葉を出した時に、観客として、選手として、あるいはスタッフとして参加する参加者自身が、何をしたら Zero Wasting に向かっていくのかということが例として示されていけば、例えばマイ・アクションという形で、「私はこうする」という一人一人の目標として行動に結びついていけるような例を発信できたら、目標が本当に実現していくことにつながるのだらうと感じました。

例えば、会場に入る時にセキュリティ上の問題で飲食物を持ち込めないことがあります。リオ大会では、ペットボトルの飲み物を持ち込もうとしたら入り口で捨てさせられて、そこでゴミが発生していました。であれば、マイ・アクションとして、会場にペットボトルを持っていかないとか、そういった分かりやすい情報を発信することも1つのアクションになると思います。参加する際の事前の心構えをきちんと情報発信していくことは、Zero Wasting に向けてみんなで同じ方向に向かってアクションを作っていくという点で、良い取り組みになると思いました。そのようなことをバックグラウンドとして気にしながら議論していくと良いのではと思います。

崎田座長：大事なご指摘をありがとうございます。今、全体像のお話をしていて、この後に10項目という素案が出ていますが、個別の項目を検討していくわけですが、その項目を作る時に、具体的に、選手あるいは観客の行動や取り組みが、それを実現させるのかイメージを思い描きながら検討することの重要性や、それを最終的に社会に発信する時に、みんなが具体的にどのように行動すれば目標に貢献できるのか、分かりやすく発信することが重要であるというご指摘でした。結局私たちはそのためにこの場で議論をしていることを確認できたという点で、重要だと思えます。ありがとうございました。

杉山委員：今いろいろお話が出ていました Zero Wasting については、そもそも、まずは日本語で全て固めて、それを英語なり他の言語に訳したうえで、世界の皆さんに発信することなのではないでしょうか。何が言いたいかというと、日本人が日本語で考えたものを、それをそのまま訳した形で発信していくと、その言語で読んだ方たちにきちんと理解してい

ただけるかどうかという点について、気になっています。前回までの委員のご意見というところで触れられていたかと思いますが、埋立に関しては、日本の場合は埋立率が低いのであえて目標にする必要はないという意見がありました。確かにそのような考え方もありますし、日本国内向けの発信ではそれでよいとも思うのですが、海外からすると、日本ではこんなに埋立が少ないということで日本をアピールするという意味では、あえて目標として掲げる考え方もあると思います。国内向けなのか、もっと広く海外に向けての発信なのかということ、恐らく両方なのでしょうが、意識するべきだと思います。

パブコメも日本国内だけで行うのでしょうか。それとも、英語に訳して世界に発信し、世界からご意見をいただくのでしょうか。その辺りのことも気になっています。

崎田座長：大事なお指摘です。今パブコメの話がありましたが、言葉として、全体像や方向性を示すときに、国内を意識して日本語で作っていくことと、世界を意識して英語でどう伝わるのか考えていくことが、非常に大事なポイントになってくると思います。私としては、両方考えながら、私たちがベストと考える選択をしていかないといけないという話だと思っているのですが、何かご意見がある方はどうぞ発言していただければと思います。両方考えていく以外にないとは思いますが。

事務局：パブリックコメントに関しては、運営計画を英文に訳して行う予定です。同時に、この Zero Wasting という言葉に関しては、資料の p3 にもありますように、説明書きを加えながらの物ですので、Zero Wasting という言葉をそのまま訳すのではなく、文章全体で言葉の意味が分かる形にさせていただければと思います。

崎田座長：ありがとうございます。両方見据えながら作っていくということでもよろしくお願ひいたします。あと、1つ情報なのですが、目指すべき方向性の画の中に循環経済という言葉があります。日本も 2000 年に循環型社会形成推進基本法ができて、基本計画ができ、循環型社会づくりということはずっと言ってきたのですが、特にこの循環経済という言葉が出てきているのは、サーキュラーエコノミーという表現で世界的にそのような流れが出ていることを明確に意識した言葉かと思います。今年、フィンランドでサーキュラーエコノミーの国際大会が開かれ、今回は、来年の秋に日本で国際大会を開催する話が進んでいるという情報をいただきました。この点については環境副大臣が先日の 3R 推進全国大会の最初の挨拶でおっしゃっておられ、発表してよい段階だから申し上げたということでしたが、実際の細かい動きは今後決まってくるのだと思います。情報として、今準備が始まったというところで、ご理解いただければと思います。参考情報としてお話しさせていただきます。

では次の議事に行きたいと思います。よろしくお願ひいたします。

事務局：資料 3 p4~p8 を用いて、資源管理の優先順位について説明。

崎田座長：ありがとうございます。一つ質問ですが、資料の p8 の図において、環境白書の平成 26 年版を活用したということですが、環境白書は毎年出しているかと思いますが、平成 26 年版の図が一番わかりやすかったということですか。

事務局：我々が見つけた最新の図が平成 26 年版ということで、少し古いですが掲載させていただきます。

崎田座長：わかりました。参考情報ですが、現在、次の循環型社会形成推進基本計画を作るための見直し期間ということで、今ちょうど議論をしている最中です。ただ、このような基本路線を変えるという訳ではなく、時代の流れの中でどういう点を強調すべきか、どのような課題を考えていくべきか議論をしている真っ最中です。どのような議論をしているか、次回の WG で今公表されている資料の中で最終版を提供しますので、次回の資料として出していただければと思います。このような図ではなくて、具体的にどのような項目を新たな課題として考えているのか、持続可能な社会への対応や、地域循環圏づくり、資源のライフサイクル全体を見据えた取り組みの重要性など、10 項目ぐらい出ていますので、ご紹介できると思います。参考情報としてお話をさせていただきました。

この東京大会における資源活用の優先順位ということで、全体像に関してご意見があれば頂ければと思います。その中で、今日ご欠席の森口先生から、この部分に関するご意見が出ていますので、事務局から紹介いただければと思います。

事務局：まずは、森口委員から p7 と p8 の優先順位のところについてご意見をいただいております。優先順位の原則を定めておくことは重要ですが、順位に拘って、かえって環境負荷が増えるようなことは避けるべきだが、循環基本法の中でも規定されていることには留意すべきであるということが 1 点目です。

2 点目として、同じく p7 で、再生品と再生可能資源の上下関係についてですが、今、リサイクルされた材料の下にリニューアブル、すなわち再生可能なものを使うと位置付けられています。それで良いかどうかについても今日の議論に含めていただきたいということでございます。今、この上下関係についてはあまり議論されていないということですが、どちらもリデュース、リユースよりは下位にありますが、両者の間での上下関係は明確ではなく、並列的に書く案もありうるので議論いただければという意見をいただいております。

崎田座長：ありがとうございます。森口委員からはそのようなご意見も出ています。最初のご意見は、順位を定めることは大事だが、これを実際に運用する時に、順位にこだわり

すぎて環境負荷が増えることに考慮しながら判断する必要があるということでした。これについては、具体的な場面で判断することが大変重要なので、ご意見として伺っておくことが大事かと思えます。例えば、リサイクルは非常に大事ですが CO2 も非常に出すものなので、リサイクルの成果を考えながら、全体の環境負荷最小化に向けて納得できるようなやり方を選ぶことは重要なご指摘だと思えますので、これはきちんと受け止めさせていただきます。

次の再生品と再生可能資源の上下関係のところについては、皆様からしっかりとご意見を頂いたほうが良いかと思えます。他の部分でも結構ですので、優先順位の考え方についてご意見を頂ければと思えます。

古澤委員：まず、森口先生のご指摘にある優先順位についてですが、環境負荷の事については循環法でも規定されているというご指摘で、これは全くその通りでして、十分注意しなければならないと私も思えます。それとともに、循環法では、技術的及び経済的な可能性についても留意しなければならないと規定されています。そういった考え方を組織委員会の実務の中に落とししたときにどうなのかと言うと、今ここで出ているような環境負荷の問題が1つ、その他にもやはりコストの問題ですとか、実行可能性、例えばそういった品物が調達できるのかとか、リサイクル先を考えたときに処理業者のキャパシティがあるのかといった、実行可能性の問題があると思えますので、環境影響とコストと実行可能性を考慮しつつということは、外に出して行くときも明確にされた方がいいかと思えます。

2つ目の再生品と再生可能資源の順位についてですが、これは先生のご指摘の通りで、私も十分に議論がされてきていない論点だと思えます。東京都では、過去に有識者の先生方に少し議論をしていただいたことがあったかと思えます。具体例で考えると、例えば紙の場合は古紙配合率が高いものと FSC 認証の紙の優先順位の話ですとか、木材で言えば、リサイクルのパーティクルボードを使うのか、あるいは森林認証を得た新しい木材を使うのかといった話であると思っています。そうやって考えると、環境影響とコストと実行可能性を考慮しつつという話はこの場合でも当然あてはまるのですが、やはり再生資源の優先順位が高いと考えるのが筋ではないでしょうか。紙の場合だと古紙配合率をある程度高くしたうえで、残った部分が認証を得た紙でということが基本的な考え方になると思えます。

崎田座長：ありがとうございます。今の古澤委員のご意見と森口委員のご意見などを併せて考えると、持続可能な物を使う、再生可能資源を使うということの順位を、繰り返し使うということの下に置くということでもいいのかどうかというお話になるのかと思えますが、それに関しては何が影響するかと言いますと、調達に大きく影響してくるのかなと思えます。調達に関しては、現在調達ルールを組織委員会で決めてもらっているので、大事な視点かなとは思いますが、リース・レンタルとの関係をどういうふうに整理しておくか

ということは、後で大きな影響が出てくる話かと思います。事務局の間で素案を作る間でかなり議論をされたのかなと思うのですが、その辺りの経緯があれば教えていただければと思います。

事務局：元々、運営計画の第1版の中でも、リース・レンタルを基本として大会を進めていくことにしています。大会は期間的に非常に短いものなので、リース・レンタル等が先であるという考え方が基本だと考えています。その中でさらに購入していく段階において、再生可能な資源に置き換えられるものについては、先ほど古澤委員の方からありましたが、環境影響・コスト・実行可能性等を踏まえながら透明性を持って判断していくのではないかと考えています。

崎田座長：先ほどの環境影響・コスト・実行可能性ということを考えれば、このような交通整理が一番実現可能性があるのではないかとご判断されたと受け取りました。

古澤委員：循環法の優先順位においては、アウトプット側に関しては優先順位が示されているという現状だと思います。しかし、大会の運営計画を実際の実務に落としていくこと、実行していくことが大変大事で、その際には、実際に実務を担当している皆さんが応用できるような優先順位を基本線として示しておく必要があるのかなと思います。その意味では、大会に即して優先順位を明確にしていくことは大事かなと思っております。

崎田座長：現実には短期間と言っても2か月くらいかかりますけれども、必ず終わりのあるイベントにおいてどういうことを考えるかということ、実務担当者が判断しやすいということはこの流れの中であることは明確だと思います。その流れの中で議論を進めていき、現実には判断される実務担当者の方たちが悩む部分があれば、また意見交換させていただくというような柔軟なやり方が必要なのだと思います。アドバイザーの森さん、その辺りで何かご意見ありますか。

事務局：順位については確かに古澤委員の話の通りなのですが、現実的にリース・レンタルが優先して、その後をやむを得ず買ってしまったものをどうするかということになると、ここに書いてあるように寄贈とか色々あるとは思いますが、最終的には破碎して、金属を回収して、焼却するという順位になるかと思いますが、注意しなければいけないことは、最終的に処理しないといけないものが出て、資源化ルールに則って処理をするということを、プロセスとして優先していく必要があると思います。

崎田座長：インプット側、資源の調達の方でこのままにしておきつつ、アウトプットの所でしっかりと資源化ルールの方に持っていけないといけないことは、きちんと伝わるよう

にしないといけないということですね。

インプット側の流れに関しては、森口委員のご発言などを配慮しつつ、やはりイベントの時のリース・レンタルは非常に重要なのでこの辺りの部分は大事にしつつ、再生可能資源を次の順位に入れておく、しかし購入した資源については、次の図のアウトプットの所に影響しますが、きちんと再資源化、あるいは資源活用していくことが大事ということですね。持続可能性が確認されたものという表現についてはどう考えましょうか。先ほどの調達ルールで認証されている物は入れておかなくてもいいんですかね。皆さんが実務の段階できちんと分かれば良いということなのでしょうか。

古澤委員：その点について補足します。再生可能資源の優先順位については都側からも色々と議論させていただきましたが、国の審議会等でも十分に議論されていないなという印象があり、そのレベルでしっかりと議論いただく必要があるテーマだと思っています。特に、これだけたくさんバイオマス資源が海外から入ってきていて、その利用による世界的な CO2 の排出の増加や森林減少は極めて大きな問題になっています。その中で、資源の使い方として、バイオマス資源や再生可能資源はしっかり使っていくのですが、その資源は、まずリサイクル品を使うことを優先し、そのうえで、持続可能性が確認されていることが重要です。持続可能性が確認されていることは実は難しく、この分野ではよく合法性と持続可能性という言葉を並べて、デューディリジェンスをしていくという形だと思います。完全な確認はかなり厳しい所があるのですが、デューディリジェンスをして、合法性や持続可能性が重要でないものについては、リスクを低下させていくのが大原則です。優先順位の書き方については、持続可能性が確認されたものという書き方でいいのかなと思います。

崎田座長：そうですね、ここであまり文言を増やしておく、その後の一般的にレガシーとして活用していただくときに、言葉が多すぎるという形になりますので、こういう流れの中でしっかり判断していただければありがたいと思います。

勝野オブザーバー：私は調達 WG にもオブザーバーとして参加していますが、少し入れ子状態になっていると思いながら今の議論を聞いていました。調達コードの中で、木材と畜産物と農産物と水産物については特別なルールが定められており、今後、紙とパーム油の基準について議論するのですが、それらが個別の基準として、調達コードにアタッチメントのようにつけられることになっています。全体としてインプット側は全ての物品が調達コードでカバーされたものとして調達されるという構造がありつつ、インプット側の中にも持続可能性が確認されたものが登場してくるので、その関係性をきちんと整理しておかないと、少し混乱があると思います。

先ほど、持続可能性が確認されたものかどうかは裏取りが難しいというお話がありまし

たが、先ほど挙げた品目については少なくとも別途ルールが定められていて、例えば、こういう認証を取ったものを調達しましょうということが示されているので、そういったルールとこの優先順位の間をきちんと整理して示すことは重要かと考えております。

崎田座長：今の場合、例えば、持続可能性が確認されたものというのは、東京大会においては、木材・食品・パーム油・紙に関しては個別ルールできちんと示されているということが確固として言えるのなら、それはそれでありなのではないかとは思いますが。

古澤委員：今、勝野さんがおっしゃられた話は、持続可能性に関しては当然、再生可能資源だけでなく、その他の資源でもそうですし、リユース品を使う場合も、リース・レンタルの契約をするときにも、全部調達コードでカバーされているという話なので、調達コードは持続可能性を大きな原則として掲げていますので、それに則った調達がされていれば、この「持続可能性が確認されたもの」という記載は、いわば注記レベルの話で、大原則は調達コードで示されているということかと思えます。

崎田座長：それぞれのルールが示されたものに関しては、素材的にはルールに則ってきちんと調達しながら、商習慣としては、流れをしっかりと考えながらやらなければならないということは当然ですので、両方をうまく考えながら判断していただくことが大事だと思います。このような議論がなされたことを記録に残しながら、このまま進めたいと思いません。

白井委員：少しまとめ方を工夫してはどうでしょうか。森口先生のご意見も踏まえながら、繰り返し使うことをリユースに配慮したものとか、再生可能のところをリサイクルに配慮したものとして、再生品・再生可能資源と並べて書くという方法もあるかと思えました。再生品を「繰り返し使う」に分類しているから整理が少し難しくなっていると思えます。リース・レンタル・リユース品というのはリユースに分類して、その下に、リサイクルに配慮されたものということで、再生品と再生可能資源を並立に記載するといった整理の仕方が1つの方法としてあるのかと思えます。

古澤委員：確かに、「繰り返し使う」という表現が私も気になっていたのですが、正確には上から行くと、減らすがあって、その下のリース・レンタル・買い戻し特約とリユース品がリユースですよね。そして、3つ目の再生品がリサイクル、4つ目の再生可能資源がリニューアブルということで、再生可能資源とはいわばバイオマス資源ということですね。

勝野オブザーバー：リニューアブルだけが性質が違うので整理が難しいと思えます。リニ

ューアブルなものの中にもレンタル・リースがあるかもしれないし、概念が違うものをここに入れているので、上下関係の整理が難しいと思います。リニューアブルなものという概念は全体にかかっている可能性があると思います。

崎田座長：そういう意味で言うと、森口先生のお話のように、上下関係は明確でなく並列的に書く案もあり得るということを考えると、「繰り返し使う」と「再生可能な物を使う」という部分の間が、線ではなくて点線で書くと言ったようなことも考えられるかと思っています。もう少し新たな視点の意見があればおっしゃっていただけますか。

勝野オブザーバー：再生可能資源は、「減らす」にも関係するし、「繰り返し使う」にも商品としてあり得るし、再生品として存在する可能性もあるので、三角形の図の中に入れてはいけないのかもしれないと思います。注意書きで、こういう物を調達する時はなるべく再生可能資源を使いましょうといった形にするといいのかもしれないと思います。

古澤委員：三角形の上から減らす、リユース、リサイクル、再生可能資源とあります。その下の2つは、再生資源ではなくてまったくの天然資源を使う場合なんですね。天然資源を使うときは再生資源を使いましょうというのがこの面の主旨で、全般にわたっての再生可能資源としては、バージン材を使うときには再生可能資源を使いましょうという趣旨で整理をした方がいいと思いました。そうすると、確かにこれだけの表現だと、意味が矛盾してしまうなと思いました。

杉山委員：再生品がリユースされるとか、再生品がレンタルされるということもありえますか。そうするとその辺の境目はどのようにするのでしょうか。

崎田座長：その辺のことは全部あり得ることなので、現場で実務担当の方がよりよく判断しやすいような状況にしつつ、循環経済の流れの中で納得するような形に文言を整理した方がいいかと思っています。次回までの宿題とさせていただきます。事務局とご相談し、次回にこの修正案、あるいはこの考え方をもう一度お話ししたいと思います。

杉山委員：もう1点伺います。一番上の項目に、最小限の調達、資源ロスの削減、省資源な物の調達とあり、言葉の意味としては分かるのですが、具体策として、それを実現するためにリース・レンタルするのではなく、リース・レンタルとは関係なく最小限の調達、例えば100台必要な時に150台調達しないとかいった事は当たり前なので、一番最初の項目には違和感があります。理念としては分かるのですが、最小限の調達とは具体的にどのような事を指すのでしょうか。

崎田座長：今おっしゃっているように、150台調達する予定を130台にするといった量的な話も含めて、要素としては全部入ると思います。そういう意味では、この表を見ながら最善のことを実務担当者がやっていただくようにすることが大事なのではないかと思います。7ページのアウトプット側の表なのですが、この表についてももう少しご意見いただくとありがたいと思います。

古澤委員：色々な大会のように一時的な物品が多い場合、あるいはそれ以外に都内でも例えばオフィスビルを撤去する場合、あるいはイベントをやる場合などにおいては、実務的にはリース・レンタルでなるべく済ませて、あるいは買い戻し特約を付けて調達をしたりですとか、できる限り売れるものは売って、最後にそこから先に廃棄物処理を考えるということが通常だと思います。ですので、上の方は通常行われている事でもあるのですけれど、大会という、非常に短期間であるだけでなく、限られた時間で、準備の方もたいへん多数のスタッフで一気に色々行わないといけない。その時に、とにかく手っ取り早い方策に飛びつくということにならないようにするためにも、優先順位を示すことは重要だと思います。

それから、下の方、リサイクル・固形燃料化・廃棄物発電といった辺りなのですが、資源の有効利用という観点からしても、実際のマーケットでの物の流し方の観点からも、廃棄物の処理においてリサイクルできるものはリサイクルして、固形燃料で引き取ってもらえるものはそちらに回すという考え方は通常だと思います。その点もしっかり明記しておいて、現場でわかりやすくすることが重要だと思います。

事務局：私が先ほど説明した話を古澤委員が繰り返して説明してくれました。表の上の方に「省資源、資源ロスの削減」と書いてありますが、確かに調達の話でもあると思うのですが、今の時代では、メーカーは製品を作る時に資源をなるべく減らして作るし、資源化しやすい、あるいはリサイクルしやすい製品を作ろうとしますよね。そういった努力は非常に大切ですし、そういった努力を間接的に結び付けていくことは非常に重要だと思います。

崎田座長：この話から言えば、インプット側の減らすというところで、調達する時に、最小限の調達、資源ロスの削減、省資源な物の調達、いわゆる環境配慮設計のものを調達するところをインプット側の最初に強調し、そのうえで、そういったものをアウトプット側に流していくときに同じことが書いてあってもいいということですよ。

勝野オブザーバー：これまでもこのWGで議論があり、飲食戦略検討会議などでも議論されており、実施されるかどうかは置いておいて、リユースカップやエコバックみたいなものを導入したときに、あまりにもセンスがない商品であれば、せっかくリユースで作った

のに捨てられてしまうということにもなってしまいます。今、このことが観点としては入っていませんが、持ち続けたい、魅力的な物を作らないとゴミになってしまういうところもあると思います。コストを下げたり資源を削減することもすごく重要なんですけれども、持って帰りたい、お土産にしたいと思わせるというエッセンスもすごく大事な観点なのかと思います。

崎田座長：今のお話は、環境配慮設計ということだけでなく、長く使いたいと思うようなものを作るという観点が重要ということですね。

あと、私から1つ事務局の方に質問したいのですが、実際に多様な現場で実務の方が判断する時に、分かりやすい判断というものが非常に大事だと思うのですが、ISO20121を全体で活用する時に、この辺にはどのくらいの文言が入っていると、そういう詳細な所は出てきていますか。そういうものとの付け合わせは進んでいますか。

事務局：ISOのマニュアルについてはこれから作成していく予定で、細かい文言がどこまで入るかといったところは未定です。これまでのWGでもお話がありましたが、アウトプットをどうしていくかといったガイドラインのようなものを内部的に作っていかないといけないと考えておまして、内部的な物があるという状態がISOの中できちんと位置づけられるというような関連性になってくると考えています。

崎田座長：分かりました。内部のルール作りは組織委員会で行って、ISOではこういうルールを作っているという所が入ってくるという理解でよろしいですね。

インプットの事で盛り上がりすぎましたが、アウトプットに関してここでご発言しておきたいということがあればよろしくお願ひします。

杉山委員：先ほど、インプットの方では調達コードがあって、そちらで基本的にこのようなものを買わないといけないということが決められているということでしたが、アウトプットの場合、例えば固形燃料化、あるいは廃棄物発電をした場合に、本当にそれがCO2の削減や資源の削減になっているのかということをどのように検証するのでしょうか。デュエリジェンスと言っていいのかわかりませんが、そこは特に調達コードのようなものがないと思いますが、今後どのように対応していこうとされているのかきちんと考えておかないと、立派に聞こえるけれど実は怪しい技術がたくさん出てきたということがあってはいけませんので、その点が大変気になっています。

崎田座長：基本的にはこれが基本ルールの大元だと思うのです。それを実際に活用していただくときに、そういうことをどこまで判断するかというのを、現場に伝える前に意見交換することが必要なのかもしれない。ただし、現場で細かく判断することはできない話

ですので、ここで大元を決めていくことが重要だと思います。そしてそれを基に、どう処理をするかまで考えたうえで調達をするということにもっていかないといけないと思います。調達の所で、何を調達したかで、最後にどこでどういう状態が必要か読めてくる、そこを考えて調達し、調達した後もう一度しっかりと戦略を立てておく、全体像が必要なのだと思います。そういう物を作っていくための大元の考え方がこれなのかなと思っていますのですが、そういう理解でよろしいでしょうか。

古澤委員：今、杉山先生からご指摘いただいた点は、廃棄物処理法では最終処分に至るまでに、要は、1回先に出してさらにその先までというようなことを追っかけていかなければならないんですけども、特にリサイクルのマーケットに入ってしまったときに、場合によっては怪しい物の動き方をしているケースがあることも実情ではあることは認識しておりますが、その辺はリユースの場合、リサイクルの場合、一旦廃棄物処理法を卒業して有価物として売られている段階も含めて、しっかりと抑えていくことが契約に当たっては重要なことかと思っています。

崎田座長：そうすると、調達の段階でサーキュラーエコノミーとしての全体像を明らかにできるものを調達していくみたいな事を言っていくのか、そこまでは言わないで後で考えるのかということが、実は調達の際にすごく大事な話になりますね。今、調達ルールを考えるとところの4品目では、こういうことも考えながら議論が進んでいると思いますが、それ以外の所に関して、ここまで調達の際に入れるとなると、かなり循環型社会にとっては重要ですけど、これからのレガシーとして残る時にはその辺を入れた方がいいでしょうか。

古澤委員：まず骨格を言うと、修理や加工の委託契約をする場合や、リサイクル契約や廃棄物の処理委託契約といった契約をする場合もサービスの調達になりますので、調達コードの持続可能性に関する基本的な考え方は全て反映されるという仕組みになっていると思います。ですので、調達コードは処理や加工を委託する場合にはカバーできます。問題は、物として、それがどこかで変な処理がされちゃったり、あるいはリサイクルすると言いつつも、質が悪かったり信用できなかったりといったところのお話だと思います。

崎田座長：今、それを私たちがどこまで言う話かと思うのですが、何かありますか。

事務局：リサイクルは法令上、廃棄物処理の段階まではマニフェストで管理しますが、仮にリサイクルされた鉄あるいは抽出された鉄が、市場でどのように循環していくかというところまでは、我が国の法律ではそこまで管理する義務はないのですね。リサイクルした後の財がどう回っていくのか、あるいは調達したものを転売・譲渡した時のその先を追う

ことは、実態上非常に難しいと思っております、しっかりと呼びかけはしないといけません、例えば後利用のために売った場合、買った先の方がどうするかということについては、所有権もその方に移転してしまうので、どのように使うかを追うことはなかなか難しいのではないかと思います。

崎田座長：おっしゃる通りなのですが、そこを踏み越えるかどうかという辺りが、杉山委員のご質問なのかなと思っていたのですが。

杉山委員：具体的に言うとプラスチックのリサイクルですとか、現状でも怪しいものが率直に言ってありますので、それがどうなるかという所が非常に気にかかっています。

崎田座長：容器包装リサイクル法でみんなが一番課題視しているところは、廃プラスチックなどが色々集まったときに、例えばマテリアルリサイクルの時に、リサイクル資源として形を作る前のペレットのような段階の状態の所までは追えるんですけども、その後何に使うかということについては、法律上は報告義務がない形になっているんですね。本当にそのままいいのかというところが容器包装リサイクル法での議論の大きな1つなので、そこをご提示されているんだなと思いながら伺っておりました。なかなかその次まで踏み込んで、そこで具体的に規定できるかということ、かなり大変な課題ではありますけれども、全部の製品ではなく、みんなが課題視している製品に対して一步踏み込めるかどうかということについては、今議論している真っ最中ですけども、そういう課題があるということは認識しておいていただいてもいいのかなと思います。

古澤委員：現行の法令上は、廃棄物処理施設・リサイクル施設に入って、そこから残渣物や有価物が出てきます。有価物はもちろんマーケットで動かすことが原則ですが、ご指摘のように怪しいものもあるのですね。基本的に、政府の政策としては怪しい所には踏み込めというスタンスだと思っています。例えば産業廃棄物の場合でも、有価物の売却先をできるだけ明らかにするように誘導する政策が取られていると理解はしていますが、なかなか怪しい世界なので、きちんとした義務付けが難しいところはあります。その部分ですよ。普通にリサイクルされるだけなら何の問題もないのですが。

崎田座長：バーゼル法も25年ぶりの見直しをしたばかりで、廃棄物処理法も、有価だと主張するものをどのように手を付けるかと言うことで法改正をしたばかりですが、そのような視点を持つことは流れとしては重要ですが、それをどのような形で示していくかは、やはり宿題かな、議論が必要な所かなと思います。宿題の場所が明確に出てきたということで、この再生利用のところも宿題という形で置かせてください。

あと、ちょっと違う視点で、熱回収についてですが、再利用・再生利用が大事ですけれ

ども、もし焼却処分がされた場合に、日本は熱回収率が結構低いという現状がありますが、そこをしっかりとやることを示すということで良いかと思えます。

事務局：p7のところ、例えばペットボトルの話を考えますと、今の議論の流れでは物品についてのイメージで議論をしていると思うのですが、では、ペットボトルは再使用できなければ再生利用するのですが、リサイクルは何だろうというと、原料にしているんですね。粉々にして繊維を作ったり、もう一度ペットボトルにしたり、卵パックにしたりしているんですね。それはどのように記載していけばいいのかが少し気になりました。

崎田座長：そういう意味では、どういう風にリサイクルされたか分かるようなものを使っていく精神がすごく大事だと思います。例えば、大会で、あるいは社会で使われたペットボトルがボランティアの方の制服になるとかですね、そういう循環をいかにここで示していくかがすごく大事な事だと思います。あるいは、ここで使った紙がトイレットペーパーになって戻ってきて、また観客が使うとかですね、いかにも循環経済がきちんと成り立っているようなところをきちんと出して行くことが大事だと思います。ですので、先ほどの怪しい世界に対してどのようにチェックするかということと、次の社会に対してのレガシーとして提案できるようなものをどう見せていくかの両面が重要だと思いながら、お話を聞かせていただきました。

少しここで長く時間を取ってしまいましたが、次の、目標として設定する項目の所に行きたいと思えます。ここが最後の項目ですので、残り時間をしっかりと使って意見交換をしたいと思えます。よろしくお願いします。

事務局：資料 3p9~p12 を用いて、目標群として設定する項目について説明。

崎田座長：参考の机上資料として出ている物は、2016年10月に出していただいたものですが、現在バージョンアップしているという理解でいいですか。

事務局：バージョンアップの作業中という所です。

崎田座長：このような資料を基にして、どの場所からどのような物がどのくらい出てくるのか予想されるかという調査を現在行っているという理解でよろしいですか。その大まかな数字は、次回WGかその次のWGには出てくるという理解でいいですか。まだ難しいでしょうか。

事務局：精度等の問題や、まだ決まっていない所もあるといった問題もあり、まだ難しいと考えています。

崎田座長：そうしますと、どこからどのくらい出てくるものが一番多いかといった大まかな数字があった方が、次回以降指標の議論をする時に、いいですね。数字をどうするか考えるときに、全体像がどこまで把握できているか分からないと、指標の議論までたどり着かないと思うので、細かい数字はなくてもいいですので、次のバージョンを次回かその次のWGで出していただくとありがたいと思います。

古澤委員：今のところで、まさにこの課題整理の表は、どこに注目していかなければならないかというところをピックアップするためにずっと整理が続けられている資料だと思うのですが、この資料の右側に四つの評価項目があって、1年ぐらい前に色々な議論があった所かと思います。量が多いもの、環境への影響が心配なもの、外から注目されて批判を浴びるリスクがあるもの、レガシーとしてプラスの意味で残していける物はどこにあるかといった項目だったかと思います。もちろん、数字を全て入れるのは今の段階ではまだまだ大変な作業だと思います。ただ、これから10項目整理していく関係から言いますと、特に多そうなものや、特に重要な部分については、数字までは厳しいと思いますので、例えば二重丸の印をつけておくだけでも、全体の中でだいたい絞り込めるかと思います。

崎田座長：今のご意見のように、例えば重要度という項目が右端にありますが、ここは重要というところは、二重丸をつけるのか、色を変えるのか、数字を入れることが難しければそういった作業をしていただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

そういった全体感を皆さんと共有させていただいたうえで、目標の所で資料p9とp10についてのご意見をいただければと思います。今までの意見交換の中で、p9のどのような項目を考えるかについては、これまでも皆さんと意見交換をしてきたので、できればp10の右側の所を基にしながら意見を言っていただければ、今日の大事な所の意見交換ができるかと思います。よろしく願いいたします。もちろん、そこに入る前の段階のご意見でも構いませんが、まず、この点に関して森口委員からのご意見を事務局の方から説明していただけますか。

事務局：p10の表の中でございますが、インプット側のリサイクルの側で「リサイクルしやすい製品の調達」という項目が挙げられているが、目標の候補にはこれに対応する目標が挙げられていないというご意見を1点いただいております。

また、目標の5つ目として「メダル」というところを挙げていますが、「リサイクルしやすい製品」について、何か次の目玉となるものがあるかどうか検討が必要ではないか、例えば、飲料容器について、ペットボトルであれアルミであれ、製品から製品に戻っていくという事例を目玉としたらどうかというご意見をいただいております。

また、同じページの「廃棄物由来CO2の削減」ということにつきましては、今はCO2

と書いておりますが、温室効果ガス全体という概念にした方が良いのではないかというご意見、また、「廃棄物由来」という所の範囲は、難しいところもありますが、リサイクルに要するエネルギーや、リサイクルによる代替効果まで含めるという考え方が良いのではないかというご意見をいただいております。

さらに、物品のカーボンフットプリントの総量を計算するような試みもあるのではないかと、今、脱炭素 WG の中でカーボンフットプリントを計算しております、そういったところと協調することができるのではという視点でのご意見を頂いております。

崎田座長：いくつかご意見がありましたが、リサイクルしやすい製品の調達に関して目標の中に入れてほうが良いのではないかという話がありましたが、3番の目標の中に「調達物品の再使用・再生利用」という記載がありますが、調達物品は、再使用・再生利用しやすいものを調達し、なおかつ調達したものはきちんと再使用・再生利用するというをどこまで記載するかということですね。

事務局：先に申し上げますと、具体的にこのようなリサイクルしやすい製品を調達しますというところが今見えている訳ではないところもありまして、目標として掲げることはなかなか難しいのですが、実績として把握できたらその辺を報告していくという所ではないかと考えておりました。

崎田座長：先ほどのインプット・アウトプットの図のところ、皆さんからいただいたご意見の中で、インプットにおいて環境配慮設計やそういったものを調達しなければいけないという意見はかなり出ていましたが、目標の中に入れるかどうかということですね。

古澤委員：今おっしゃられたように、リサイクルしやすい製品を調達したり、リサイクルしにくい製品を避けることはもちろん重要ですが、目標に掲げるものがある程度絞り込んで、10項目程度の目標を掲げていくときに、組織委員会が全体として取り組んで行けるような目標はなかなか思いつくものがないという印象があります。

崎田座長：例えば、目標という所は、できれば定量化、できなくてもそれなりの文言の入れ方とか把握ができるようなものは入れていくけれども、調達の時にこのような考え方をすべきだといった、資源調達に関する要望事項や配慮事項みたいなものを、目標とは別の所できちんと入れておくということは、先ほどの優先順位の考え方を示すというところできちんと入れておければよいと思います。

事務局：第二版を作っていくうえで大きく打ち出していく項目は、p10の目標の候補だと

考えております。これ以外にも、取り組みという所では、ここまで出さないものも第二版の中には書いていくことを考えておりますので、そういった中には書き込めると思います。

崎田座長：大事な方向性についてはきちんと書いていただく、ここではもう少し把握できるものをきちんとやっていくということですね。

次の「再生材の利用」に関しては、都市鉱山メダルに関してはかなりインパクトの強い取り組みができてきているけれども、その次を担うような情報がもう少し共有できればいいのではないかというご提案もありました。例えば、ペットボトルのボトル to ボトルなどの話ですね。今、循環型社会の象徴的な物として、ペットボトルの高度利用がこの前の循環型社会形成推進基本計画の目玉だったということもありますので、素材としては大事な話ではあると思います。こういう取り組みをここに入れていくかについては、また皆さんのご意見を伺わないといけないことですね。

あと、物品のカーボンフットプリントの算定についても、地球環境保全の側面のところで、廃棄物由来 CO2 の削減の話がありました。これは CO2 だけではなくて、例えばメタンの話などもあるので、GHG、いわゆる温室効果ガスという側面を入れておいてもいいのではないかというご意見がありました。GHG 全体も入れておきたいですが、それは把握できるかどうかという所がありますけれども。

事務局：カーボンフットプリントを計算する中では、おおむね活動量×原単位で計算していきますが、原単位の中にはだいたい場合は GHG も入っていますので、計算できると思います。

崎田座長：そうすると、ここは CO2 という記載ではなく、GHG と入れておいてもこちらで反映できるということですね。それでは、CO2 ではなく GHG、いわゆる温室効果ガスという捉え方をさせていただければと思います。

事務局：ただ、脱炭素 WG の中では GHG と分かりながらも、伝えるときには CO2 という言い方をしてしまった方が分かりやすいので、CO2 という言い方をしております、その辺りは歩調を合わせた記載をしつつ、意味としては GHG も含まれていると理解していただければと思います。

崎田座長：日本でもそういうふうに CO2 と書きつつ GHG も含んでいることがあると思いますので、脱炭素 WG と歩調を合わせておいていただけるとありがたいと思います。あと、物品のカーボンフットプリントはどこまで脱炭素 WG で把握していますか。

事務局：基本的には入っております。

崎田座長：分かりました。

事務局：事務局からもう1点、p10の項目の中で漏れがあるのではないかという所についてご議論いただければと思うのですが、レンタル・リースをするという行為そのものは、リデュース、発生抑制に入るのではないかと思う所がありまして。リユース・リサイクルについては箱が重なっているところがありますので改めて整理をさせていただければと思うのですが、それとは別にレンタル・リースというものの自体について、リデュースに入るのかどうかご議論いただければと思います。

崎田座長：レンタル・リースを目標の中に入れるかということについては、私たちが考えていることをはっきりと伝えられるので入れた方がいいとは思いますが、その量をどう把握するかですね。ただ、物品の調達量が分かればそれは入れやすい、やろうと思ったらできるということですね。

事務局：箱を整理する中で、実際に数値目標を置けるかどうかは別としても、食品というもののくくりと、容器包装のくくりだけがリデュースに入っているのは、表の中での整理上、バランスが悪いのではないかということで挙げさせていただきました。

崎田座長：大事なお指摘ありがとうございます。実は、食品と容器包装だけのバランスの悪さというところは実は感じていて、施設整備とかそちらの方で何かできないかなと考えていたのですが、それはなかなか難しいなと自問自答していました。レンタル・リースという話にして把握できるような数字で出していただくことはこの分野では大事なことかと思えます。

関連で話をさせていただきますと、「食品ロス削減（食品廃棄物の発生抑制）」ですが、これは世界的な課題として重要です。私も今それに取り組んでいるので、目標に入るとはすごく大事なのですが、定量的な目標はすごく難しいと思います。今、数字の把握を色々な機関がやっている真っ最中ですので、そこからどう減らすかという数字を出すのはすごく難しい所です。SDGsの場合も、食品廃棄物は2030年に半減するように、ただし、生産から消費までのすべての段階での食品ロスをできるかぎり削減するようにという、定性的な言い方で伝えていきます。そういう配慮を皆さんと行いながら検討しなければいけないかなと思います。次回以降そのような話をしたいと思います。

古澤委員：今の点についてよろしいですか。2点あります。1点目は言葉遣いに関してで、英語にすると難しいのですが、SDGsで食品ロスと食品廃棄物という言葉が使われて

いるのですが、どちらかと言うと、我々が日本で使っている言葉の感覚からすると、食品廃棄物と訳されている物が食品ロスで、食品ロスと訳されている物はまた別のものというイメージでとらえた方が、英語で使われている言葉と日本語で使われている言葉の整合が取れると理解しています。英語で言っているフードロスと日本語で言っている食品ロスはちょっと違うんですね。

また、食品廃棄物ということではあるんですけども、決して狭い意味での廃棄物の減量ということが目的でSDGsに加わっている訳ではなくて、食品という物は製造の段階から世界で大きな影響があり、しっかり流通がされないという課題もある、世界には飢餓もあるということ、世界の人達をお迎えして行うオリンピックにおいて、食品は大事にしなければならないという位置づけがあると思います。SDGsはまさにその意味で掲げられていると思いますし、食品ロス削減は極めて重要なテーマの一つだと思います。

その定量的な把握をどうするかということについては、あくまでも大会ですので、大会の中で測ればいいと思います。それが1つの参考資料にもなるのではないかと思います。飲食戦略検討会議でも、選手村での食品が無駄になってしまうということについては、皆さんが大変心配をされていたと思います。ここは大事な所かなと思います。

崎田座長：現実の中できちんと成果が出せるようなところを、次回、量的なところを検討するときには今のようなところを皆さんで議論していきたいと思います。ご指摘ありがとうございます。では、残された時間で、項目についての意見、先ほどのようにこういう項目を入れたらいいのではないかとか、そういった意見があればお伺いしたいと思います。

古澤委員：p10の下の部分で、バランスの良い目標群になっているかという論点があります。ここは、今までのWGでの色々な議論の中で、目標として掲げる項目は、もちろん重要度が高い項目について掲げるけれども、建設の段階もあれば運営の段階もあり、品目と言っても色々な品目が入っている、関わる主体も、組織委員会が単独で行うものもあれば、多くの皆さんの参加を得て行う物もあるといったように、幅広くバランスが取れているかどうかというご指摘があったと理解しています。そのようなときに、最初の方で勝野さんからご指摘があった、観客の方が自分は何をすればいいかという話で仰っていただいた会場にはペットボトルを持っていかないといった例がありましたが、このような7番の運営廃棄物の関係は、皆さんの目に触れるところで、多くの人が協力しやすい部分です。ここは、そういう意味でも重要なかなと思います。かつ、量的にも、重量はともかくとしても、容量で考えるとペットボトルなどは夏の時期ですので相当な量があると思いますので、そういうことも踏まえて7番については検討していくことが必要かなと思います。

崎田座長：7番の目標をどういう数字で出していくのかということについては、おっしゃるように、分別排出をどのようにするのかといった話と、把握の仕方についてといったと

ころが全部関係してきますので、全体像としてどう把握できるか。7番を検討するにあたってはその辺りも影響してくると思います。資源の分別とかそういった話は、7番を検討する時にしっかり話した方がいいのでしょうか。どこで検討していく形になりますか。

事務局：主に運営時の廃棄物の分別というところかと思います。

崎田座長：分かりました。それではこの話をする時には、分別のこと等も考えてから話すということになりますね。具体的な項目を出して物品等を考えていくときに、色々と細かい影響が出てくるかと思います。あと、具体的な物品と、それを踏まえた全体のリサイクル率といった色々な事を考え始めると、もう少し違う表現にしたらいいのではといったご意見も出てくると思いますので、皆さんと柔軟に考えながら議論した方がいいと思っています。事務局からは、先ほどレンタル・リース等の目標を挙げた方がいいのではないかというご提案がありましたが、他に何か作業を進める中でお考えになったことやご提案されたいことがあれば、今ご発言いただければありがたいですが、よろしいですか。

杉山委員：ちょっとお聞きしたいのですが、以前から大変議論が出ていたかと思いますが、選手村の食器については、色々検討中かと思いますが、もしリユースができれば、それはそれで目標に掲げてもいいような、大変画期的な事だと思いますし、もしリユースができなければ、先ほどから議論されていますが、リサイクルしやすい製品の調達といった話にも関わってくると思いますので、もしその辺りの動きに進捗があれば教えていただきたいと思います。

崎田座長：何回か前のWGで、飲食提供基本戦略の検討を早くしてほしいということで、この議論になる前に食品の話と食器類についてかなり議論してきたのですが、今、それがどのような形で落ち着いているか、発表されているかということに関して、今のご質問に対するお答えとして、事務局の方からコメントを頂けますか。

事務局：飲食戦略の中で取りまとめた記載では、検討するということになっていたかと思いますが、現状はまだ結論が出ておらず、検討を行っている状況です。リユース・リサイクル、リサイクルであればどういう形が可能なのか。仮にリサイクルとした場合、食品残渣があるものをリサイクルすることは技術的にもハードルが高い所がございまして、そういった所も現実にもどどのように行っていくか、今検討している最中です。

崎田座長：こちらの委員会としては、できるだけリユースをしてほしいという提案をして、もしそれができなければ分かりやすいリサイクルをしてほしいということで、こちらからの提案書という形で色々な要望を出させていただいたのですが、検討の様子も、第二

版の終わりぐらいまでには出てくると思うのですがどうでしょうか。

勝野オブザーバー：私は飲食戦略検討会議の委員として参加しているのですが、飲食戦略は9月13日に素案が出ており、そこで一旦検討会議は終わりということで、そこで出た意見を反映したバージョンというものを、ちょうど一昨日、内閣官房に設置しております食文化に関する関係省庁の連絡会議の場で、組織委員会から9月13日の検討会議で委員から出た意見を踏まえた修正バージョンということで資料を出していただきました。戦略素案においては、検討会議の中で、方向性としてはできるだけリユースのものを使うということは記載されていますが、実態としてどうするかというのは、組織委員会が決められるということで、結論がそこに書かれている訳ではないという状況です。

崎田座長：方向性としてはそういうことを社会の課題として検討するように受け止めていただいている、その結果具体的にどのように落とし込むかについては、組織委員会の運営面に関わるので、これから具体的な検討をするという理解でよろしいですか。

皆さんから色々ご意見や情報をいただき、ちょうど2時間経ちました。今回は、今まで目標に関して色々とお話はいただいていたんですが、じっくりと意見交換いただく時間は現実には少なかったということで、本日しっかりと話しいただきました。その結果として、宿題も見えてまいりましたので、それを踏まえながら、次回はより目標の具体的な話、指標を検討する入り口に入っていきたいと思っています。この後少し事務局とも打ち合わせなどを深めないといけないと思いますが、今日の話を受け止めさせていただき、次回の準備をしていくということでよろしいでしょうか。何か次回に向けてご発言あれば最後をお願いいたします。

古澤委員：10個の項目については、次回目標なり指標なりを議論するなかで整理していく必要があると思いますが、若干1点だけ気になっていますのは、10番「環境中への排出の削減」についてです。私自身もどう整理したらいいものか悩んでいたのですが、目標は達成するためのアクションがセットになっていると思いますが、ここは、指標としてはよく分かるのですが、これを直接達成するためのアクションというよりも、1番から9番までの色々なアクションを行った結果としての10番ということで、目標と指標の考え方の中でどのように交通整理したらいいのか、良いアイデアはないのですが、注意が必要だと思います。

崎田座長：1番から9番までの成果としての10番として、例えばCO2については何%削減といった目標を掲げることができるのかできないのかといった検討が必要であり、10番の目標の立て方については少し配慮が必要だという話ですね。他に次回に向けてのご意見はありますか。

今日はいろいろとご発言いただきまして、事務局も色々と作業があるかと思いますが、次の11月13日のWGまでに意見交換しながら準備を進めていければと思います。それまでにご意見があれば早めにメールで事務局までお知らせいただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

以上